

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第94号

毎月発行

発行 2020年(令和2年)3月16日 月曜日

2020年(令和2年)3月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、新人の歴史ドキュメンタリー作家。現在、日本刀の真のルーツを発掘した映像【鬼がつくった日本刀】を制作中。3月から公開予定。趣味は縄文研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



この9年間で当新聞が到達した最大の 復興策・最大の再興策・最大の防災策

これから先、たとえ10年をかけても、 有能なリーダーを東北全体で育成し、 有能なリーダーを選べる政治に変え、 有能なリーダーとともに東北を変える

コロナ騒動により、各地で、今年の東日本大震災慰霊祭は取り止めとなった。コロナウイルスに感染して亡くなられた方々には心からお悔やみ申し上げることとして、九年前に発生した東日本大震災での死者数、行方不明者数、避難者数、いまでも避難されている方々の規模と比較しては、いかに規模と比べては、いかに少ないか、その圧倒的な違いをあらためて思い、そして単純に慰霊祭の「中止」だけで良いのかとつくづく思う。

ほんとに忘れっぽい マスメディア

このような時代にあつて、他にもさまざまなやり方があると思うのに単純な中止とはまことに残念である。

似て、ただただ騒ぎ立てるだけで、「伝えることの意味、重さ」などどこかに置き忘れてしまったかのようである。

今の政治も忘れっぽい マスメディア

あの大震災は、最低限でも、今世紀中は忘れてはならない。それほどの衝撃を与えた出来事であり、いまだに精神的に克服できていないのであり、他の災害と同列に扱ってはならないと考える。

そして「政治家の使命は国民の生命を守る事」などとはもう言わないで欲しい。そうした気持ちがないことがはつきりと伝わってきている。

必要な復興仕切り直し

あの大震災発生から満九年を過ぎた。この九年間の、けつして満足とは程遠い復興作業を棚上げて、あらためて今後の東北の復興と再興を考えてみたいのである。そのためにもやらなければならないことも提案したい。

「鬼がつくった日本刀」

約千三百年前、東北の地から全国に連れ去られた多くの奥州刀鍛冶たちがいた。しかし「鬼」と蔑まれ、苛酷な労働を強いられながらも、数々の名刀をつくり続けた。だが古代から中世にかけての日本刀の名工といわれた刀工のほとんどが奥州刀鍛冶の流れを汲んでいたにもかかわらず、その後すっかり忘れ去られてしまった。



埋もれた歴史を発掘するドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀①】

九年間の「成果？」

この九年間の復興事業の成果総括は、最近、コロナ騒動の陰でわずかに話題になっていく程度だが、冷静に判定すべきである。

まずは被災地の人口減少である。ど大人が減っている。とどまることなく、高齢化した被災地という事情も逆シナジーとなつてこの先どうなっていくのだろうか。

膨大な資金と時間を投入してかさ上げした土地に元の住民が戻らないのだ。

また、巨大な防潮堤があちこちで林立しているが、その防潮堤はかえって海の様子を見えなくしてしまい、海を遮断してしまった。さらに防潮堤で囲まれた地域にも住民が戻らないのだ。

これらを見ただけで、いったい何のための復興事業だったのが自然に分かる。九年間という冷静になる時期を経過して、この復興事業を評価すると、あまりにも滑稽な「成果」と結論づけざるを得ない。

決めつけは良くないかもしれないが、一番得たのはだれなのだろう。無理なく絞り込めそうだが、被災者、被災地などどうでも良かったのである。

最大の復興策・最大の再興策・最大の防災策は良きリーダー選び！

ずばりと結論を言おう。

この九年間ではつきりと分かったことは、

『最大の復興策・最大の再興策・最大の防災策は良きリーダー選び』

だということだ。

いまさらそれを言っても仕方がない、あたりまえのことをいままさら言つて何になるというような批判がすぐにも聞こえてきそうであるが、筆者はこれ以外に、この九年を端的にまとめる言葉を知らない。

リーダーたちの足跡を振り返れ

この結論に同意したくなくとも、現実の推移はそうではなかったか。

大震災が発生してすぐの対応を思い起こしてみよう。そして福島第一原発からの避難誘導も思い起こしてみよ。

そして当座の生命維持のための対応も思い出せ。

復興計画策定がどう進んだのかも思い出せ。

そして復興計画を取りまとめるときにきちんと方針を示したか。

だからだと長引く復興事業のときに、ときどきのきちんとならざる経過説明があったか。

そして結果を見よ。

これらの節目でリーダーたちは何をしたか、しなかったか。

そうして、これから先を考えてみよう。これまでのリーダーたちでほんとうによいのか。東北の未来を託せるのか。ほんとうにあきらめてしまつてよいのか。

【これから先、たとえ10年をかけても、有能なリーダーを東北全体で育成し、有能なリーダーを選べる政治に変え、有能なリーダーとともに東北を変える】

遠回りといわれようが何と言われようが、この先十年以上をかけて、まずは有望なリーダー候補を育成していこう。一人ではだめだ。複数必要だ。それも組織の大きさに応じて階層的に複数候補を配置する必要がある。

国からの天下りではなく、よそ者でも良いし、東北全体で、有望な若者を選抜して、育成していこう。

同時に、そうしたリーダーを選べる政治風土も育てていこう。

新たな政治グループを作ればいいではないか。

結果として、何年先になるか分からないが、良きリーダーを選ぼうではないか。

あきらめ、絶望、放棄は結局のところ、膨大な負の遺産として自分たちに選んでくるのだということ。この九年で学んだのではない

だろうか。

だから、どんなに遠回りに見えようが、もしこのリーダー選びに成功すれば、九年という短期間の回り道は許せる。

逆に、ここで方向転換しないことを考えると空恐ろしい。その道には中長期の東北没落しか見えない。

【パニック】はリーダー不在が招く

コロナ騒動において発生したパニックは、別なアングルから見れば、リーダー不在とリーダーシップ不在が引き起こした社会災害であるとも言える。

きちんとしたリーダーがいて、状況と対策をきちんと説明すればパニックは発生しなかった。

今回のコロナパニックはリーダー不在が引き起こした社会パニックの典型例と記憶することしよう。

あの震災も同じではなかったか。

鈴木北海道知事

有望な若手の政治家といえれば鈴木北海道知事。元々は東京都庁の職員であったが、破綻した北海道夕張市の市長に立候補して当選し、政治家に転身し、見事、瀕死状態の夕張再建を果たした三十代の若手政治家。

どこかのピント外れの二世、三世議員ではない。たつき上げの実戦派である。与党に近いとか、コロナ騒動では政府の実験道具に

埋もれた歴史発掘ドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀】のお知らせ

東大和市会館ハミングホール 「小ホール」
(〒207-0013 東京都東大和市向原6-1)

西武拝島線「東大和市駅」より徒歩7分
2020年4月11日(土) 上映開始10:00
2020年5月27日(水) 上映開始19:00

埼玉県SKIP CITY 彩の国ビジュアルプラザ
映像ホール

(〒333-0844 埼玉県川口市上青木3-12-63) JR西川口駅よりバス9分
2020年4月1日(水) 上映開始19:00
順次、宮城県での上映会開催予定

上映時間：約60分
入場料：500円(税込) 全席自由席

DVD - 3月下旬販売開始
3300円(税込) 送料無料
解説本(カラー) - 4月販売予定

問合せ先：株式会社遊無有

mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp

されたとかいろいろ噂されているが、素直に夕張市再建の実力は評価できる。

本物の若手政治家不在の時代には稀有な存在である。夕張市から北海道知事に転身したさばきも見事である。

学歴社会にあつてはめずらしく高校卒という経歴も興味深い。次世代のリーダーとして大いに期待できる。

できれば、道州制復活の折には、東北・北海道州のリーダー候補に名を連ねて欲しいものだ。

大災害時におけるリーダーとは

最後に、つたない筆者の緊急時のリーダー像を披歴して、この記事を締めくくりたいと思う。

まず、緊急時のリーダーは評論家ではない。評論家タイプは不適任

どころか、メンバーの生命もその優柔不断さで脅かす。リーダーの本領は大ピンチのときに現れる。あらかじめ用意された答えはない。ぶっつけ本番であり、じっくり考えている余裕はない。即断即決の世界。日頃の生き方、考え方がそのまま出てくる。

そしてリーダーはすべて結果で判断される。良い面悪い面両方あるのが当たり前で、その悪い面ばかりを重箱の隅をつつくように批判する評論家による責任のない評価はあまり気にすることはない。言わせておけばよい。

こうした頼もしいリーダー候補の登場を切に願っている。



埋もれた歴史を発掘するドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀②】



第67回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【柔らかめの簡単 ナマコ酢】

美味しい日本酒が
飲みたくなる！！



郷土料理愛好家
松本由美子氏

今回は動画を見てナマコ酢を作ってみました。いろんな作り方がありますが、お酒を使い少し柔らかめのナマコ酢に仕上がるようにしてみました。ポン酢で6時間程浸し、ポッカレモンを数滴たらしめました。生姜とあさつきを添えて簡単ナマコ酢です。結構、コリコリ感があり生姜が爽やかでした。(松本談)

【第43回 三陸酒海鮮会延期】

ギリギリまで事態の好転を待ち望んでおりましたが、残念ながら、3月14日の三陸酒海鮮会は延期とさせていただきます。延期後の日程は未定です。またみなさまと再会できるのを楽しみにしつつ、事態のなりゆきを見守りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



長根貝塚



横穴古墳



日本初の産金

==== DVD 広告 【涌谷 7000年の歴史】====

宮城県北部にある小さな田舎町である涌谷町。しかしこの町は古代史研究にとって非常に興味深い町でもある。日本古代史の激動の時代の痕跡がいくつも残っている。それを再発掘した映像のDVDを紹介。



DVD - 涌谷 7000年の歴史

【涌谷 7000年の歴史】

涌谷町には実に7000年の歴史がある。この長い歴史を代表的な5つの歴史遺産であらわし、地元涌谷高校生4人が文化財保護職員のリードで学習していくプロセスを撮った映像。深く学習していくにつれ町の歴史という枠組みを飛び越え、日本という国家が出来ていく古代の激動の真ただ中にタイムスリップしていく。映像は117分の長編。
DVD 販売中 3300円(税込)
送料無料 問合せ先: 株式会社遊無有 mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp



写真でお伝えする
東北の風景
えんぶり
写真撮影 尾崎匠



あの日から9年



不忘の碑

んどのないので、1年前との違いもよく分かる。街中から荒浜に向かう県道荒浜原町線には、津波から避難する方向を示した標識ができていた。

あの日、大津波は、遮るものもない仙台平野に容赦なく襲い掛かった。海岸線から実に3km以上も内陸まで押し寄せ、全てを押し流し、盛土構造の仙台東部道路に至ってようやく堰き止められた。

この時の教訓から、海岸に沿って走る県道塩釜巨理線は、同様の防潮堤機能を果たせるために高さ6mかさ上げされることになって

いたが、その工事も終わらず、昨年10月から「東部復興道路」として供用されている。今日も車が頻繁に行き来

していた。

「東部復興道路」を越えて荒浜地区に入る。

この地域唯一の寺院だった浄土寺の跡地では、今年も慰霊法要が営まれ、今は災害危険区域となつてしま

ったこの地域にかつて住んでいた方々がたくさん訪れて手を合わせていた。

寺院自体は既に4年前に仙台東部道路近くの内陸に移転し、新本堂も完成している。来年からはそちらの新寺院の方で法要が営まれるとのことである。

この地域の人たちがあの日避難して助かった仙台市立荒浜小学校の校舎は、震災遺構として大津波に襲われたままの当時の状況を伝えてくれている。校舎は館

内の修繕工事のために1月14日から3月3日まで休館となつていたが、修繕工事が終わった後も3月末まで休館が延長されることとなつた。

この荒浜小学校に加えて昨年8月、この地域にも一つ震災遺構が誕生した。

「仙台市荒浜地区住宅基礎」と名付けられたこの新しい震災遺構は、大津波で基礎だけが残った住宅跡6戸と津波による浸食地形が保存され、エリア内は見学用通路が整備されている。

写真や証言を掲載した説明看板も設置されており、大津波の恐ろしき破壊力と共に、かつてここにあった人々の暮らしの営みの痕跡も伝えてくれている。

荒浜地区の海岸は、かつて

て深沼海水浴場として知られていた場所だが、いまだ海水浴場は再開していない。この日も風が強かったせいもあって波も高かったが、当然ながらあの日のように防潮堤を越えてくるようなことはない。

防潮堤から仙台市街の方向を見てみると、建物が立ち並ぶ中心地と大津波によってなにもかもなくなったこの地域とがあまりに対照的に映る。

荒浜小学校以外にはどこにも逃げ場がなかったあの日の反省から、「東部復興道路」の西側には津波避難タワーが、海に近い東側には「避難の丘」が整備されている。荒浜小学校の南側にできる予定の一番規模の大きな避難の丘は未完成だ

ったが、荒浜小学校の北側に完成した「海岸公園」の一角には、高さ約10mの「避難の丘」ができていた。

あの日の大津波で、江戸時代、仙台藩祖伊達政宗が命じて植林された「潮除須賀松林(しおよけすかまつりん)」はほとんど根こそぎ倒され、流されてしまった。政宗は慶長6年(1601年)に仙台入りしたが、その10年後の慶長16年(1611年)に慶長三陸地震に遭遇している。

仙台平野はこの地震で今と同様広い範囲が浸水したと見られ、それを受けて政宗はこの「潮除須賀松林」を整備し、沿岸に貞山堀を掘り、今で言う「多重防護」の備えをつくった。同時に、奥州街道を内陸寄りに移し、

城下町も海岸から離れた内陸寄りに構えたとされる。荒浜地区を始め仙台市の沿岸では、もう一度防災林を復活させようと、植樹作業が続いている。再び植えられた黒松も着々と育っているのが分かる。

弟が見つかった南長沼で今年も手を合わせた。私にとっては弟が間違いなく生きていた、地震発生時刻14時46分よりも、この地に大津波が押し寄せた15時54分の方が重要である。帰ろうとしたら入れ替わりにやってきた人がいた。きつとこの人もこの地で大切な誰かを失ったのに違いない。

荒浜を離れ、再び若林区役所へ。

別にこの日だけが震災のことを振り返る日というわけでもないのだが、毎年この日だけはやはりいつもと同じ心持ちではいられない気がする。心にさざ波が立っているような、居ても立っても居られないような感じなのが自分でも分かる。そのようなわけで、毎年この日は午後仕事を休んで、弟の最期の地、仙台市の沿岸、荒浜地区へ出掛けてい

今年も足を運んできた。荒浜への出発地は、毎年同じ若林区役所である。入ろうとしたら、知り合いとすれ違った。とっさに「献花しに」と伝えたが、「献花」って言葉、普段言い慣れてないので、発音がおかしくて「ケンカしに」って聞こえてたらどうしようかと、ちょっと思った。

この日は午後仕事を休んで、弟の最期の地、仙台市の沿岸、荒浜地区へ出掛けてい

今年も足を運んできた。

今年も足を運んできた。

執筆者紹介

大友浩平

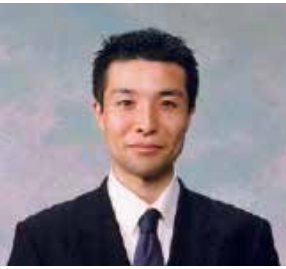
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagna51

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



あの日弟がたどったであろう道を通って一路荒浜へ。事前の雨予報が外れて、例年通り風は強かったものの、晴れのいい天気になった。この日を除いて普段、荒浜に足を運ぶことはほと



荒浜の海



ビールとやきとり缶



南長沼

あの日ここまで戻ってこれなかった弟を悼んで有志の方々が中庭につくってくれた「3・11不忘の碑」には、たくさんの方が手向けてあった。

普段飲み歩いていることの多い私だが、この日だけは何かあるかと大人しく家に帰る。

子どもの頃、よく弟と食べたやきとりの缶詰、今日は特大サイズのものを取り寄せてみた。内容総量、実に1750g、通常サイズが1缶85gなので、その20缶分を超える分量である。1L缶のビールが小さく見える。

1缶はいつもあつという間になくなってしまったので20缶分くらい楽勝と思っただが、思いのほか食べ応えがあった。当たり前である(笑)。

あまり知られていないことだが、やきとりの缶詰の中で元祖であり、最も有名と思われるこの缶詰、実は気仙沼で造られている。

ともあれ、このようなバカなことができるのも、生きていればこそのことである。何年経っても、あの日の痛みが消えることはないだろう。

それはそれとして抱えつつ、また明日から日々、気の向くまま、足の向くまま生きていこうと思う。



海岸公園の避難の丘



献花台



若林市役所



建設中の避難の丘



法要の様様



浄土寺跡地



津波避難方向標識



案内板



東部復興道路



仙台市荒浜地区住宅基礎



防潮堤から市街を望む



植林された松



コケの花



早池峰山



冬晴れの下六角牛山

シリーズ 遠野の自然
「遠野の啓蟄」
 遠野 1000 景より

いま、日本も世界もコロナパンニックで大騒ぎ。パンニックはだんだん巨大化し、もともと形なきものが「実害」まで包含するまでとなったが、あらためていったい何のための騒ぎなのかと立ち止まって考えてみると

ただただ不思議である。人間という種は、大自然という不動の基盤を忘れ、人工的な環境ばかりにいて、パンニックに踊らされるという典型的な見本である。こういう時はゆっくり旅行でもして、浮世の騒ぎを



開花を待つ

忘れたと思うが、不要不急の外出は遠慮せよというならば、遠野の景色をみて心慰めるとしよう。この時期は、三寒四温で、寒と温の両方の景色が見られる。



フクジュソウ開花



モクレンの芽



冬之三光坊



落陽

東北の未来展望は『1300年前までの東北』にあり！

あの大震災が千年単位の災害というなら、1300年前までの東北を思い起こしてみようか！
それまでの東北は、大和朝廷とはまったく別の「クニ」だった、そこに戻ってみるか？

千三百年前の東北

筆者は、ここ二年ほど、東北の埋もれた古代史の発掘作業を映像で表現する作業を行っている。

そうすると、いまから千三百年前までは、大和朝廷とはまったく異なる独自の文化や経済、宗教を持っていたようである。

そして経済的にも豊かであったし、海外との独自交流もあつたようである。

その海外交流とは、おそらく縄文時代から存在していたであろう「北方交流圏」で行われていたものである。

この時代の東北は、往時の大和朝廷の中央集権国家とはまったく逆の、あちこちに分散する中小の集落が、それぞれの得意分野を活かして、広範囲な分業を行っていたようだ。

現代、地方分権と騒いでいるが、すでにそれを実践していたというわけである。

こうした形態を「国家」と呼ぶのはふさわしくない。「国家」と区分するため「クニ」というのが適切と考え、この言葉を用いている。

千三百年という視点

われわれ現代の東北人、あるいはもっと範囲を広げて東北に縁のあるものは、江戸時代や明治以降の東北の衰退ばかり見ているように思う。そして落胆ばかりしているように映る。

しかし、東北の中長期の

未来を考えると、その視点はまことに不十分であり、東北の歴史のほんの一面しか見えていないと言わねばならない。

東北がすっかり変容してしまつた千三百年前を想起することを提案したい。

千三百年という歴史は何も京都や奈良の専売特許ではない。むしろ東北にこそふさわしい。しかも東北の歴史はもつともつと古い。

ある意味では、京都や奈良の方が千三百年しかないという視点さえ成立する。茶化すわけではないが、長い日本の歴史から見たら、京都や奈良は新興集落、新興都市にすぎないともいえるのだ。

東北は千三百年かけて衰退してきた

しかし、この千三百年前に、大和朝廷に大規模に侵略されて以降、東北の富の奪取が始まり、人も奪われてきた。

それが千三百年間も休まず続いている。

そしていま、東北はこのままでは衰退どころではなく、果てしなく「消滅」への道を転がっているという見方さえ現実味を帯びてきていると思える。

その兆候は、とどまることのない人口減少に現れている。

東北からの人口流出は、千三百年前から始まつた。

それは強制的な移住であり、大和朝廷による大規模

な侵略によって「俘囚」となつたエミシが、全国に強制移住を強いられたところから、この人口流出の流れが始まつた。

その後、千三百年間、幾度となく、人口流出は続き現代へとつながっていく。

こうした視点から、東北の復興や再興を考えてみるのは意義のあることである。

沖繩は独立志向、東北も見習うか？

十一年以上になるが、沖繩旅行に行った際に、強烈な思い出として、いまでも忘れることができない出来事があつた。

たまたまオプシーズンに沖繩に行ったこともあり、観光用のバスにはわずかな観光客しかいなかった。

そこで、若いバスガイドから、通常の観光案内ではなく、突然、沖繩は独立できると話が始まつた。

沖繩は今すぐにでも独立できる。独立国家として十分にやっつけていける。何も日本の、鹿児島県の一部に甘んじていなくてもいい。

まだ十代ではないかと思われるバスガイドからの突然の話に筆者は驚いてしまひ、言葉が出なかつた。

大震災後に書いた『東北独立』

この出来事は、ずっと頭の片隅に残っていて、最近では、東北の未来を考えると、ときにいつも思い出す。

筆者が大震災発後に執筆した書籍である。

大震災後の東北の未来を考えたとき、上辺はともかく、東北は大した支援もなく、利用されるだけ利用されて衰退していく。それに抵抗するには、「東北の独立」しかない。その足掛かりとして「道州制」を活用するという骨子だつた。

そして、具体的かつ資金的に「東北の独立」を実現するためのシミュレーションまで展開した。

まったく出来ないことではないのである。ただし、当然ながら、国の資金などあてには出来ない。「東北人」の資金拠出が不可欠なの言うまでもない。

とはいえ、一人一人が莫大な資金を拠出せよということではなく、わずかな資金拠出で、東北での政治的独立基盤を実現できるといふ提案であつた。

残念ながら、過激に思われたタイトルに読者が恐れをなしたのか、大手出版社の本ではなかつたせいなのか、低コスト本の見栄えの良くない本のせいなのか、まったく売れなかつた。

未来を考える東北の視座とは何か？

時代の転換点では、よく歴史に学べと言われる。

この言葉は、いまの東北にこそふさわしい。

いうならば、千年単位の発想に切り替えてみてはどうなのか。

実際にそうしてみたら「時代の景色」はずい分と違って見える。

とても新鮮だし、いまの時代も良く見えてくる。一番重要なのは、東北の未来への道筋が見えてくるということである。

現代に復活させる千三百年前までの東北

東北は争いはずい分負け続けてきた。

物理的な戦争、紛争、侵略だけではない。経済的な搾取もあり、人口の奪取もある。

しかし誇りに思えばいい。東北から戦争や争いを仕掛けたことはいまだかつてない。それほど平和を愛する地域であり、その伝統は千年単位以上の長さで継承されてきている。

だから、争いに負け続けたことを嘆く必要はない。しかも、閉鎖的な東北ではなかつた。ユーラシア対立東岸、シベリア、樺太、そして千島列島などで形成する「北方交流圏」、しかも北陸地方まで包含した交流圏で活発に、しかも平和に交流してきたのだ。

こうした千三百年前までの東北は未来のモデルにはならないものだろうか。



西暦 700 年頃の日本

かつてはふたつのクニだった



砂越豊著一【東北独立】